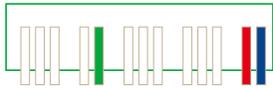




緑風舎
自由空間



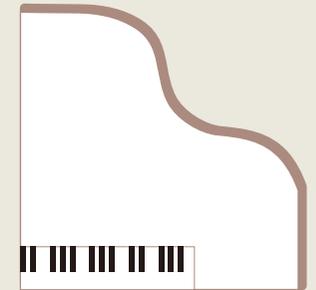
第 29 回緑風舎コンサート

YUYA TSUDA

津田裕也ピアノ・リサイタル

PIANO RICITAL

MENDELSSOHN
& SCHUBERT



SUN. NOV. 23
2014
6:00 P.M.



緑風舎音楽ホール

メンデルスゾーン

無言歌集より

- op.19b-1 「甘い思い出」
- op.19b-3 「狩の歌」
- op.67-5 「羊飼いの嘆き」
- op.102-5 「子供の小品」
- op.67-2 「失われた幻影」
- op.62-2 「旅立ち」

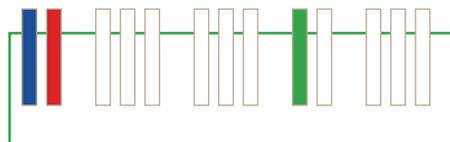
幻想曲「スコットランド・ソナタ」 op.28

厳格なる変奏曲 op.54

----- 休 憩 -----

シューベルト

ピアノソナタ イ長調 D959



ピアノ：STEINWAY HAMBURG製

「無言歌集」のこと

「お茶が終ると、ミス・グレイヴズがメンデルスゾーンの『無言歌』を一、二曲ひき、ケアリー夫人が『ひばりの家に帰るとき』が『走れよ、小馬』歌った。」(サマセット・モーム『人間の絆』より)

メンデルスゾーンの「無言歌集」は小説や映画でも情景描写の小道具として、しばしば登場します。「無言歌集」(“Lieder ohne Worte”)とは文字通り「言葉のない歌」という意味で、歌曲風のメロディに簡単な伴奏をつけただけの、形式もごく単純な短い曲のことをいいます。メンデルスゾーン(1809-47)が「無言歌集」を書き始めたのは20歳の頃、普通の人々が日々の出来事や感想を日記に書くのと同じような感覚で書いていったようです。時には旅先からの手紙の中に、楽曲の一部が書かれていたこともあり

津田 裕也 Yuya Tsuda : piano



©Christine Fiedler

仙台市生まれ。2001年東京藝術大学入学。同年、第70回日本音楽コンクール第3位02年第7回宮崎国際音楽祭にてウラディーミル・アシケナージ氏によるレッスンを受講。05年東京藝術大学を首席卒業、安宅賞、アカンサス音楽賞、同声会賞等、数々の受賞を果たし、同大学大学院修士課程に進む。07年第3回仙台国際音楽コンクールにて第1位、および聴衆賞、駐日フランス大使賞を受賞。仙台市より「賛辞の桶」を、宮城県より芸術選奨新人賞を授与される。同年10月よりベルリン芸術大学においてパスカル・ドヴァイヨン氏に師事し研鑽を積む。10年東京藝術大学大学院修士課程を首席修了、併せてクロイツァー賞を受賞。11年ベルリン芸術大学を最優秀の成績で卒業、その後ドイツ国家演奏家資格を取得。同年ミュンヘン国際コンクール特別賞受賞。ローム・ミュージック・ファンデーション奨学生。

ソリストとしてベルリン交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団、ドイツ室内管弦楽団等と共演。

東京、仙台、新潟でソロリサイタルを開催するほかNHK-FM「名曲リサイタル」、仙台クラシックフェスティバルへの出演、10年からはドイツ各地でもソロリサイタルを開催、地元紙にて好評を博す。simcレーベルよりソロアルバム「悲愴、さすらい人幻想曲」を発売。

室内楽活動にも積極的に松山冨花氏とデュオを組み、ナミ・レコードより4枚のCDをリリース。

また、ジェラルド・プーレ、堀米ゆず子、前橋汀子、加藤知子、山崎伸子、イェンス＝ペーター・マインツ、パヴェル・ゴムツィアコフなど多くの著名な弦楽器奏者と共演している。

Vn.白井圭、Vc.門脇大樹と共にピアノトリオ「Accord」を結成し、東京、札幌、九州をはじめ国内各地で演奏。

これまでにパスカル・ドヴァイヨン、ガブリエル・タッキーノ、ゴルドベルク山根美代子、角野裕、渋谷り子の各氏に、室内楽をゴルドベルク山根美代子、田中千香士、河野文昭、山崎伸子の各氏に師事。

ました。現代ならさしずめ“ブログ”といったところでしょうか。

「無言歌集」は各6曲ずつの計8集からなり、生前に出版されたのは、第6集までで、第7集は、1851年、第8集は、1867年に出版されました。第1集を出版した時には、メンデルスゾーンは「ピアノのためのメロディー」と記しており、「無言歌集」となったのは、第2集を出版してからのことでした。どの標題も分かりやすい名前がついていますが、メンデルスゾーン自身がつけたものはほんのわずかで、ほとんどは出版時に関係者がつけたものです。メンデルスゾーンが活躍した時期、ブルジョア階級を家庭を中心にピアノが教養として普及しました。そのため、家庭で気楽に弾ける作品が多く作られました。この「無言歌集」もその一つです。曲想が優美で温かく、技巧的にも難しくないので、発表の当初から現在まで、多くの人々に愛され、弾き続けられています。